

[研究ノート]

郁達夫と「沈淪」

Yu Da Fu and "ChenLun"

鄧 紅

Deng Hong

—

郁達夫(1896-1945)本名文、達夫は字、1896年中国浙江省富陽県に生まれる。富陽については、彼の代表作である「沈淪」(および彼のほかの作品にも)の第三節において細かく書いてある。こういう意味では、「沈淪」は彼の自伝小説と言われている。また、同じく第三節では、彼の三才から来日までの経歴を書いてあったが、ほぼ史実に忠実である。

資料によれば、郁達夫の一生は次のようである。

1913年17才に長兄とともに来日し、翌年第一高等学校の特設予科に入学し、15年に名古屋(《沈淪》中の「N市」)にある第八高等学校(「沈淪」中の第X高等学校)の理科に入学し、一年後文科に転じた。四年後の1919年東京大学経済学部に入學した。22年春東大を卒業した後、一度文学部言語学科に学士入學したが、同年七月帰国した。

1922年から1938年の間、上海、北京、武昌、上海、広州、杭州、福州など点々として、雑誌の編集者や大学教授など、官吏までやりながら、本格的な作家生活にたずさわっていた。

1938年12月、シンガポール(当時は南洋という)に移り、華人新聞《星洲日報》の編輯者としてに招聘された。シンガポールにおいて、本職と作家活動を行なうとともに、抗日宣伝と文化啓蒙にも精を出していた。しかし、一年後太平洋戦争が勃発し、シンガポールも日本軍に占領されたので、郁達夫はスマトラ島に亡命し42年頃バヤクンブーという町に定住し、潜伏生活を送った。しかし、日本語に堪能であることが知られ、日本の憲兵隊の通訳をさせられた。

1945年、日本降伏直後の8月29日、日本憲兵隊に暗殺されて、憲兵隊の内幕を知り尽くしているためであった。日中戦争の八年間において、中国文学史上最大の損失と言われる出来事であった。

簡単でありながら、以上は郁達夫の肉体的生涯である。

郁達夫の本格的な作家生涯は、「沈淪」から始まったといっても過言ではない。その前にいくつかの旧体詩を作ったり、日本語で小説を習作したりはしたが、ほとんど成功した作品がなかった。1921年6月、同様文学青年であった郭沫若と「創造社」という文学団体を結成し、10月創造社叢書の一冊として、小説集《沈淪》を出版した。この小説集に「沈淪」とほかの二篇の短篇小説が入っているが、「沈淪」が特に大きな反響を呼んで、彼の作家としての地位を確定した。

それから、彼はさまざまな職業に勤めていながら、筆耕にはたいへん勤勉的で、小説を始め、詩、散文、随筆、紀行文、文論、政論、訳文などたくさんの作品を世に送った。1927年にも、中国近代文学史上において初めての個人全集を出版した。1982年、《郁達夫文集》12巻が花城出版社から出版された。1990年同じ12巻の《郁達夫全集》が浙江文芸出版社から出版された。また、彼に関する著述が幾つか出版されている。

郁達夫の伝記資料として、日本には《郁達夫資料》と《補篇》上、下（伊藤虎丸、稲葉昭二、鈴木正夫編、東京大学東洋文献センター叢刊第五、第十八、二十二輯、昭和48年、昭和49年）があり、また、研究の専門著書として、鈴木正夫著《郁達夫—悲劇の時代作家》（研文出版1994年版）と稲葉昭二著《郁達夫—その青春その詩》（東方書店1982年版）などがある。これらの論著が郁達夫の生涯、作家活動、作品についての評論、交友関係、そして彼と創造社及び中国文壇との関連、葛藤などについて詳しいので、ここではこれらについてあえて贅言しないことにする。

また、郁達夫の作品は、岡崎俊夫という名翻訳家をえて、その代表作が早くも3、40年代に日本語に訳されたので、多くの読者を魅了している。一部の作品は、『中国現代文学選集』5（平凡社昭和三十七年版）、『中国の革命と文学』3（平凡社昭和四十七年版）および『現代中国文学全集』（河出書房昭和三十三年版）14などに収められている。

二

主人公「彼」の性に関する描写と、彼が日本人に囲まれているのに、いかに寂しく感じ、いかに日本人に疎外された様子に関する描写とが、「沈淪」の二本柱である。

「沈淪」は、性、しかも少年の自慰と買春を公然と書いたことは、二十年代初期の中国においては強い非難を受けた。しかし、魯迅の弟で当時新文学文壇の重鎮の一人、同じ日本留学経験を持つ周作人が「沈淪」を読んだ後、沈淪を「猥褻な要素があるが、特に不道徳ではない」と、「沈淪は芸術作品であるが、受戒者の文学であって、一般人の読物ではない」と高く評価した。周作人の評価で、「沈淪」の文学地位が定められ、郁達夫の出世作と代表作になった。

今から見れば、「沈淪」の性に関する描写はほとんど問題視されなく、むしろ一種の美しい自然主義描写として評価されている。例えば、中国に出されたある「中国現代文学史」は、次のように論じている。

「沈淪」は主人公の性愛要求の心理活動を曝しだしたのことは、封建的禁欲主義に対する叛逆であり、封建文学のタブーに対する突破である。・・・「沈淪」は人々にこう告げる。人の正当的本能が抑制されて、満足できないことは、苦しいことであり、人性に反するものであるがゆえに、非合理的でもあるのだ。その反封建主義意義が明らかである。・・・世俗社会はまた封建思想に覆われているときには、このように（描写）するのは、相当勇気を要することである。しかも、彼らのような真誠で正直に告白する芸術風格は新しい文壇に爽やかな新風を吹き込めたのである。（注一）

留学生の孤独心理に対する描写は更に重大な意味を持つ。郁達夫自身が「沈淪」について、「日本に住んだことのない人には、この本の真価はわからない。文芸に真摯な態度でない人は、この本を批評する価値がない」と語ったことがあるという。これについて、鈴木正夫氏は次のように述べている。

この時代、列強の仲間入りした日本に留学した青年たちが、「支那人」と蔑まれ、疎まれた様子は、それ以降、他の留学生出身の作家の作品にもよく見られるところである。「沈淪」には、「もともと日本人が中国人を軽視するのは、我々がブタやイヌを軽視するのと同じだ」という記述がある。「沈淪」はそうした経験を共有する青年たちに最初にそれを共感させる作品である。主人公の留学生が自殺を決意して最後に叫ぶ次の言葉は、今日にもよく引用される有名な言葉となった。「祖国よ、私の死はおまえのせいだ！おまえは早く豊かになってくれ、強くなってくれ！おまえにはまたそこで苦しんでいる大勢の子供がいるのだ」。性を公然と表現したこと以上、祖国中国への富強を呼びかけたことこそが、作品の拙さにかかわらず、以後高く評価され、中国近代文学の記念的作品とされる所以である。

(注二)

拙いかどうかについて、評価の標準は知らないが、「沈淪」に描かれた「そうした経験」は、当時の日本に留学した青年たちに共感させたにとどまらず、現在でも日本に留学している留学生たちと共感し続けていると思われる。但し、「列強の仲間入りした」日本は、「金満日本」に変わり、日本人は「脱亜入欧」果たした強国の「大日本帝国の国民」から「金持ち」にかわったため、中国の留学生ないしアジアの留学生に対する軽視や蔑みないし苛めなど、あるいは中国に対する偏見は、どの程度直したか。例を二つ挙げよう。

一つは、昔から中国の留学生の中では、アメリカに留学した人は「親米」、日本に留学した人は「反日」、とよくいわれることである。例えば、筆者の知人で、今東京のある「留学生新聞」の主筆となっているJさんは、日本の某旧帝大の修士課程を終了した際、『留日記』をまとめて、中国の出版社に送った。筆者はその原稿をめくってみたことがあるが、その内容はなんと80%以上は日本の悪口を書いているのだ。また、中国の海外華僑のお世話をする政府機関中国國務院僑務弁公室に『華声』(CHINESE VOICE)という月刊機関誌があって、1997年に「日本所見所思系列」という文章を五期連続掲載していた。作者のKさんは七年前日本に来日した元留学生である。その五つの文章の内容をみると、ほとんど日本に厳しいものばかりである。その冒頭には次のように、「日本で中国人が集まってしゃべると、日本の長所をいうことがタブー視されており、『罵日(日本を罵る)』派、『説不(NOをいう)』者が多いからである」と。(注三)

二つの例は日本のいわゆる専門家の中国に対する偏見を取り上げよう。日本某有名外国語大学のN学長は、日本の中国問題専門家といわれている。しかし、この中国問題専門家は中国人から見れば、中国悪口専門家に過ぎず、テレビに出たり文章と著書を出したりするたびに、必ず中国を攻撃してデタラメと悪口をいうからである。たとえば、彼はある右翼政治評論家とともに、『解体する中国』(注四)という本を書いたことがある。この本はまるで顕微鏡をもって中国の悪いところを探しているようで、良いところを一つも書かなかった。しかも、中国がいつ崩壊するかやら難民が周辺の国に流れたら大変だなどを本気で議論して、中国共産党の崩壊は1997年までかからないということまで予言していた。大国の中国にはなんと失礼なことをいうのか。自分は中国で飯を食っているじゃないか。第一、一九九七年はとっくに過ぎたのではないか。

以上のような言動を取る(元)留学生達は、恐らく日本留学期間において郁達夫と同じ遭遇にあったことがあると思われる。また、N学長の下で留学する中国人留学生、あるいはこのような中国に対する偏見だらけのテレビ番組を見、本を読んだ人は、その心理状態が、七十七年

まえの郁達夫と一致するのは当然であろう。

私の奇想かも知れないが、魯迅の《狂人日記》に、周りの人がいかに自分のことにたくらみをもっているのを、「狂人」がひたすら妄想していることについて、細かい描写がある。「沈淪」の周辺に対する警戒感の描写は、わたしに《狂人日記》の狂人の妄想を連想させる。《狂人日記》は魯迅が日本留学期間にできたもので、「狂人」は中国留学生で周りの人は日本人だった、と気にしないとられない。しかも、「沈淪」では主人公を神経病と周りの人から言われているが、「神経病」とは、中国では「狂人」ということを考えると、偶然の一致と言いがたいだろう。

三

日本語に堪能し、しかも日本の文学者服部担風、佐藤春夫などを師と仰いだ郁達夫の小説と文章は、日本語の痕跡をかなり濃く残っている。ここでは、「沈淪」の日本語化を探ってみたい。

「沈淪」が書かれたのは1921年であった。1921年と言えば、1915年末から始まった新文化運動が六年目に数える年、白話文運動は開始してから四年しかなかった。新文化運動で生まれた新しい作家達は、胡適の言った「再造文明」のように、白話文でさまざまな文体の文章や詩歌などを造り出し、現代中国語は、こういう試みの中で生み出されたのである。郁達夫は、そのなかの傑出的な一人であった。

日本語は中国の古い時代の言葉文言文、いわば漢文から養分を吸収してできたものと見られる。明治維新以後、日本は全面的に西洋文化を取り入れて、急速な近代化を成し遂げた。日本語の近代化にともない、西洋文化を日本語に訳すときに、一部分は外来語で行なっていたが、一方では漢字で新しい言葉を造り出した、「哲学」「憲法」「経済」「芸術」「民法」などがそれである。新文化運動が始まり、白話文、すなわち現代中国語を作る運動の中で、こういった新しい漢字の言葉は、中国に逆輸入してきた。その逆輸入の急先鋒は、いうまでもなく日本留学経験を持つ新文化運動の当事者たちであった。陳独秀、魯迅、周作人、李大釗、郭沫若など、郁達夫はそのなかの一人である。

ところで、日本語を逆輸入とは、最初から意識的に行なっていたと言うよりも、作家達は白話文で創作する際、古い中国語にない、たまたま日本語にあるものを便利のために使う、というケースがほとんどだったと思われる。したがって、こういう引用は必ずしもすぐ流行って現代中国語の一成分になれるとは限らない。たとえば、魯迅の文章に、よく某某「君」が出てくる。「呉宓君」（「一是之学説」）、「劉和珍君」（「記念劉和珍君」）、外国人にも「愛良先珂君」（「鴨的喜劇」）、しかしつい「君」という中国人から見れば差別用語は中国では流行らなかった。

「沈淪」にもこういう流行ることができなかった日本式新語がある。

「沈淪」用語	現代中国語
文房具店	「文具店」
卒業	「畢業」
（バス）停留処	「車站」
行楽	「娛樂」
野菜	「蔬菜」

郁達夫と「沈淪」

××之先	「之前」あるいは「前面」
退院	「出院」
目下	「当前」あるいは「目前」
牛乳	「牛奶」
便所	「廁所」
灯台	「灯塔」
落照	「落日」

ちなみに、「卒業」と「野菜」は魯迅の文章にもよく出てくる。恐らく当時は「畢業」「蔬菜」という現代中国語はまた誕生していないと考えられる。また、「牛乳」とか「落照」は古漢文でも使っている。

四

大分県立芸術文化短期大学国際文化学科中国文化研究ゼミ1998年度卒業研究にあたって、三人の女子学生に『沈淪』の注訳を取り上げさせた。小野郁代が第1、2、3、4節、甲斐友子が第5、6節、土橋愛子が第7、8節をそれぞれ分担した。

そもそも、「沈淪」は岡崎俊夫の日本語訳があるが、ほぼ六十年の歳月が過ぎた。そこで担当指導教師の筆者は、あえて岡崎俊夫の訳を若い訳者達に伏せて改めて訳させた。これは彼女たちの中国語の勉強に大変役立つと、若い女の子の感覚と理解と現代性によって味の違う訳ができるのではないかと考えて試したかったからである。また、一個一個発音を調べだして難しい言葉に注をつけるのは、前人未踏の行動で、完成すれば、良い中上級中国語テキストができるのではないかと期待したのである。

半年は過ぎて、彼女たちの卒業研究はとっくに完成した。只今（1998年10月現在）1999年度のゼミ生は中国語発音の校正とワープロ入力に取り組んでいる最中である。拙文はその卒業研究のために書かれた解題文であり、中国語のテキストを出すときに序文にもしたいものである。

注 釈

- (一) 黄修己著《中国現代文学發展史》、中国青年出版社1988年版。
- (二) 前掲鈴木正夫著『郁達夫～悲劇の時代作家』、1、「郁達夫—その生涯と活動」。
- (三) この五つの文章のタイトルは次のようである。(中国語)
 - 1、合理主義的の日本、1997年10月号。
 - 2、現実主義的の日本、1997年11月号。
 - 3、世上最好的国民、1997年12月号。
 - 4、傲慢的日本人、1998年1月号。
 - 5、日本人的「二戰觀」、1998年2月号。
- (四) 東洋經濟新報社1993年版。
- (五) 実藤恵秀著《増補中国人日本入學史》を参照されたい。くろしお出版社1970年版。